

一般選抜・英語

【問題】

●英語

(対象：福祉心理学分野・臨床心理学分野共通)

次の英文を読んで【問 1】から【問 4】に答えなさい。なお、解答は設問ごとに、別紙解答用紙に記入すること。

Some of the best evidence for the ‘way-station’ function of working memory comes from **①experiments on free recall**. In a free-recall experiment, participants first see a list of perhaps 40 unrelated words that are presented one at a time. After all the words have been presented, participants must immediately recall them in any order (hence the designation ‘free’). The results from such an experiment are shown in Figure 8.9. The chance of correctly recalling a word is graphed as a function of the word’s position in the list. The part of the curve to the left in the graph is for the first few words presented, and the part to the right is for the last few words presented.

②Presumably, at the time of recall the last few words presented are still likely to be in working memory, whereas the remaining words are in long-term memory.

Hence, we would expect recall of the last few words to be high because items in working memory can be retrieved easily. Figure 8.9 shows that this is indeed the case; it is called the recency effect. But recall for the first words presented is also quite good; this is called the **③primacy effect**.

Why does the primacy effect occur? This is where rehearsal enters the picture. When the first words were presented, they were entered into working memory and rehearsed. Since there was little else in working memory, they were rehearsed often and therefore were likely to be transferred to long-term memory. **④As more items were presented, working memory quickly filled up and the opportunity to rehearse and transfer any given item to long-term memory decreased.**

So only the first few items presented enjoyed the extra opportunity for transfer, which is why they were later recalled so well from long-term memory.

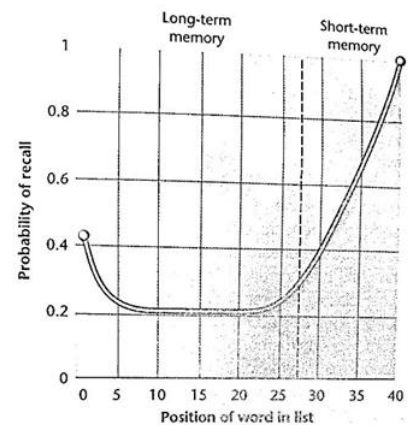


Figure 8.9 Results of a Free Recall Experiment.

出典 Atkinson & Hilgard's Introduction to psychology 16th edition: chapter 8 Memory, pp.271

設問 1 下線部①について、本文中に示されている実験手続きを説明せよ。

設問 2 下線部②を和訳せよ。

設問 3 下線部③が生じる理由について、本文中で述べられている内容を説明しなさい。

設問 4 下線部④を和訳せよ。

【解答 or 解答例】

- ① 自由想起実験では、参加者はまず、互いに関連性のない約 40 語の単語リストを、1 語ずつ提示される。すべての単語が提示された後、参加者はそれらを任意の順序で直ちに想起しなければならない。
- ② おそらく、想起の時点では、提示された最後の数語はまだワーキングメモリに残っている可能性が高いのに対し、残りの語は長期記憶にあると考えられる。
- ③ 最初に提示された単語は、作業記憶に取り込まれ、反復された。作業記憶には他にほとんど情報が入っていなかったため、頻繁に反復され、その結果、最初に提示された単語は長期記憶に移行しやすかった。
- ④ 提示される項目が増えるにつれ、作業記憶はすぐにいっぱいになり、個々の項目を反復し、長期記憶へ転送する機会は減少した。

【出題意図】

自由想起課題における系列位置効果を理解しているかを確認することを目的とする。具体的には、初頭効果と新近効果がどのような記憶過程によって生じるのかについて、ワーキングメモリと長期記憶の役割、さらに反復による長期記憶への転送という情報処理過程を関連づけて説明できるかを評価する。

特別選抜 (学内) ・小論文

●小論文

(対象：福祉心理学分野)

【問題】

1,000字以上～1,400字以内で解答しなさい。

心理的支援を行う際には、支援する側とされる側の信頼関係（ラポール）が重要であるが、初対面の人間同士が信頼関係を築くことも、現実的には難しいことである。

初対面の人間同士がゼロから信頼関係を築き、その信頼関係をさらに強めていくための工夫について、具体例を挙げながら論述しなさい。

【解答 or 解答例】

心理的支援の現場は多岐にわたり、どのような場面でのラポール（ラポート）について記述するかにより多様な解答が可能のため解答例は提示しないが、まだ信頼していない支援者に最初から自分の心理的混乱を開示することは難しい。しかし、印象形成における特徴と関連づけて考えれば、「ハロー効果」「類似性の法則」など、社会心理学や対人認知など、四年生大学の学部で習得している基本的な理論も関連していることにも言及してほしい。類似性の法則に関しては、対象が子どもであれば持っているキャラクターグッズやシール帳に集めているシールについて、対象が高齢者であれば昭和の時代のさまざまな話題に関し「情報を持って共通の話題で話ができる」ことは効果的である。逆に言えば対象者の話題に支援者がついていけなければ、スムーズなコミュニケーションは難しくなる。例えば「満州から引き揚げてきた」という経験を話す高齢者に「満州とは何ですか？」という会話になってしまえば、対象者から支援者に対する信頼は期待できないであろう。ハロー効果に関しては、支援者の肩書や職業、持っている資格により、相談者がまずは無条件で支援者を信頼しやすいことが予想できる。以上のように、解答者が想定した心理的支援の対象について、第一印象形成の特徴を踏まえた上で、無条件の受容・共感的理解や傾聴の態度、守秘義務等にも触れながら信頼関係を高める工夫や遵守事項について記述されたい。

【出題意図】

→広く福祉の現場で広く重要性が指摘されるラポール（ラポート）であるが、信頼関係ができ上がっていない心理的支援者に相談者が自らの重要な心理的問題を相談することは難しいことである。実際の心理的支援の場面を想定して、相談者（対象者）とどう信頼関係を築いていくかについて、実践的な視点から具体的なイメージができていくかという心理実践力を確認する問題である。

●小論文

(対象：臨床心理学分野)

【問題】

1,000～1,400字で解答してください。

河合(1997)は「秘密は子どもの自立、あるいはそのアイデンティティとかかわるものなので、子どもは子どもなりの秘密を持つとうとする」と述べている。さらに「秘密は、それを持つことによって他人との間に『距離』を保つことができる。一心同体ではない。これは言いかえると、秘密を持つと、他人との間に『へだたり』が出来て、孤独に陥る、ということにもなる。秘密はまったく両刃の剣である」とも述べている。これらの主張を踏まえ、子どもの心理臨床におけるカウンセラーの秘密の取り扱いについて、あなたの考えを述べなさい。

出典：河合隼雄(1997)『子どもと悪』岩波書店

【解答 or 解答例】

河合隼雄が指摘するように、子どもが「秘密」を持つことは、親や保護者という未分化な依存対象から脱却し、自分だけの内面世界を築き始めた証である。これは自立やアイデンティティ形成に不可欠なプロセスであり、心理的誕生の瞬間とも言える。しかし、秘密を持つという営みは、同時に「誰にも侵されない領域」を持つことによる「孤独」をもたらす。

カウンセラーに求められるのは、この「成長のプロセス」と「深淵なる孤独」という両義性を等しく見つめる眼差しに他ならない。単に成長を保証するだけでなく、秘密を抱えることで生じる他者との隔絶や痛みに寄り添う姿勢が、心理臨床の根幹をなすのである。この見解を踏まえて、守秘義務を遵守することの臨床的意義について、二つの観点から論じたい。

第一の意義は、守秘義務が子どもの「自己決定権と人格の尊厳」を保護する枠組みとして機能しているということである。カウンセラーが「ここで話したことは、あなたの許可なく誰にも伝えない」という約束を守る姿勢は、子どもが秘密を抱えながら独り立ちしようとするプロセスを、社会的な圧力から保護することを意味する。

例えば、親との並行面接において、カウンセラーが良かれと思って子どもの秘密を親に漏らしてしまった場合を想定しよう。それは子どもとの信頼関係を破壊するだけでなく、子どもを再び親の管理下へと引き戻し、芽生え始めた自立の芽を摘み取る行為となってしまう。守秘義務を遵守することは、子どもを一人の独立した人格として認め、その侵されない内面世界を保証するという、極めて能動的な治療的介入なのである。

第二の意義は、守秘義務という枠組みの中で「秘密を共有する」ことが、子どもの孤独を和らげ、変容させる点にある。秘密を持つことは他者との心理的距離を生むが、それは「孤独であるからこそ自立できる」というトレードオフの構造を持っている。この構造に対し、カウンセ

(過去問題・解答例・出題意図) 東北福祉大学大学院 総合福祉学研究科 福祉心理学専攻
ラーは守秘義務という器(コンテナ)を提供するのである。それは、「社会的には秘密として保持されたまま、カウンセラーという特定の他者との間では共有されている」という逆説的な構造である。この逆説的な構造によって、子どもは自分一人の重荷としての孤独から解放され、誰かに見守られながら孤独でいられるようになるのである。守秘義務は単なる倫理規範ではなく、深淵なる孤独を成長へと変容させるためのきわめて重要な治療的意義を有していると考えられる。(1007字)

【出題意図】

出題意図は、秘密の両義性を理解したうえで、両義性に関わることが子どもの心理臨床におけるカウンセラーの役割であることを文中から正確に読み解くことができるか、そして守秘義務遵守を単なる規範意識としてだけでなく、臨床的な意義があるものとして理解することができるか、さらにそれを実際の臨床場面に対応させて論じることができるかである。